
死は藝術

コーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死は芸術

【著者名】

コーキ

N4185B

【あらすじ】

父はストレスがたまっていた。毎日の日課である我が子あっくんとの散歩中、その父にインスピレーションが舞い降りる。

てくてくてくてく。

私は父としてあつくんと散歩をする、毎日。会社勤め、中間管理職、これでいいのか?と疑問に思つが実際に私の能力から言つて正当なのか不当なのかと言われると「うーん・。・。」としょぼたれた表情を浮かべ、次の瞬間には何とななく納得してしまつ中途半端な給料の金額等々、ストレスが多い私はガキを連れて散歩をしているのだ、女房が晩飯を控えている時間を使って、肉体的疲労を我慢してね、そうこんなことでもまたストレスはたまつていいく日々、日々。

小学6年生にもなると男の子の運動能力というのは達者なもので父親がこゝにしてそう、家からわずか50メートルばかりの距離をひいふう歩いているといふのに息子はどういえばもつ、全然元気でこの急な坂を小走りに走りあがつていく。

「むじやきですねえ、あつくん。かわいいねえ。」

私の唇をついて無意識にそんなコトバがこの世に降りる。

あの乱暴に跳ね上がつた寝癖が雑草のように飛び回る涎臭い髪。そう、あつくんは口の締まりがなくて睡眠中涎を垂らしつぱなしだからネ。

そう言えばわつとき、小走りに走り始めたキミの尻から「ふつ」と音がした。

この道は坂なんだよ。急坂だ。

キミは私の前を走るのだから私より上にいるわけでキミの尻は私の鼻先にあつたあのとき。

臭かつたよ、あつくん。

全体的に臭い感じなんだよ、あつくん。

やう、ふつうのおならに比べて粉っぽい「オイ」がしたのは家を出るときキミが脱糞したからだ。

尻はよく拭かないと嫌われるよ、あつくん。
臭いからね。

疲れやストレスがたまつてボツとした脳といつのは時に、突飛な
のだがしかし、アーティスティックな閃きを生む。

聖なるオブジェ。

聖者は茨の冠を被り十字架を背負つてゐる。

あつくんは頭の皮がずるむけてガードレールで磔になる。

おお、いかんいかん何と気持ちの悪い気分の悪いことか。我がか
わいらしいあつくん小学6年生が頭の皮をずる剥けにしてガードレ
ールにくくりつけられているのを想像するなんて。

頭の皮がまるでレザー製の「すら汚い」キヤップのようにも見えた
りしてでもそのキヤップの縁がぞんざいに切り取られていてしかも、
赤くなつてゐる。朱に染まつてゐる。血の色。悪趣味なデザインの
キヤップであるようだ。しかもそれがちょっとずれていて、あ、ご
めんちよつと笑つてしまつた。頭の皮が横にずれたガキ。可笑しい
ね。

急坂を登り切つて国道のそのガードレールに磔になつたあつくん
を照らしている真つ赤な夕日。ここは「ロルゴタの丘」。聖者は愚民の
罪を背負つて磔になる。キミは聖者かい？ あつくん。否。キミは疲
れ果てた父がせつかく夕方に連れだしてあげた散歩のその真つ最中
に、ありがたい父の顔面しかも鼻つ先に向けて粉っぽくて陰気な二
オイのする脱糞後の屁をかました罪人である。悔い改めよ。だから
磔だ、がつがつが。

がつがつがじやなくて。「ゴルゴタの丘でそんな下品な笑い声をあげてはいけませんよ。ほら見なさい、あっくんの眉間に縦皺が一本。「どうした、あっくん？パパはあっくんとのお散歩が楽しくて笑っているだけなのだから心配いらしないんだよ、ほらほら横断歩道を渡るつか？そうして国道の向こうの坂を下りたら海があるよ。」

あっくんの眉間から皺が消え、満面の笑みに移行する。

赤ちゃんの頃とは比較にならないほどに大きくなつて成長しているといふのに笑顔からはミルクの香りが、未だに漂つてきて嬉しいなあ、父は。

「ふう。
「？」

小学校6年生。12歳である。

「ふう。」？。

意味がわからねえんだよ。12歳と言えば小学校6年生と言えばもう、来年は中学生なんだからせめてしつかりとした言語を発したまえよ。しつかりした日本語を話せとまでは言わないよ私も。何と言つても日本語というのは世界に数多くある言語の中でも難しい方の言語であるらしいし、たかだか12年程度しか生きていらない涎まみれの寝癖端みたいなおまえにはまだ完璧な日本語を話すなんて言うことはほどだい無理なことなのだろうから。父はその程度のことは理解してやる。くせえんだよ、てめえ。

話のスジ。これだ。語学的なことは置いておくとして、スジってものがあるんだ、人間の会話にはね。

「ふう。」じゃスジどこのではなく、会話にならないじゃないか、あっくん。バカなのか ね、キミは？

私は父として毎日会社勤めをして、バカの相手に多くの時間を費やしているわけでね。我が家にはこういうバカにだけはなつてほしくないと、こう思っていたのだが、それがなんですか？このていたらぐは。

「ふう。」ですと？

ああ、父ゴルゴタの丘で信号待ちをしながら横断歩道の前にたたずみ、ストレスがたまってゆくのを感じるよ。脳がしびれるよ。きりきりと煌めくようだ。

スコーン！って感じ？なにせあっくんはバカなので軽い。

信号待ちをしている間も何となくそわそわと落ち着きがなく「わっし、わっし」と根拠のないかけ声を発しながら足踏みを繰り返していたあっくん、キミは後数秒を待ちきれなくて信号無視をしてし

まつた。罪人だ。悔い改めよ。と、クライストもきつとブチ切れたのだろうね。とにかくデカかつた。感心したよ、私は。すごいものだ。あんなトラックと言づのかダンプというのか知らないがなにしろ貨物車両があるのだね、この世に。車両はキミを跳ね飛ばしたのだけれど、その軽さ。まったくなんの抵抗もなく、何らかの物理法則によつてキミの中身が皮を綺麗に残して遙か彼方まで飛んでいつたのだ、壊れもせず骨格をとどめたままで。私にはその瞬間がしつかり見えていたからまず、茶色のネルシャツの胸ポケットから国産の高級たばこを取り出してマッチで火をともして深く一服を楽しんでそして、ゆっくりと近づいていったのはトラックの前方。

ほう、すばらしいものがちょっと小さすぎるかな。よくある獣の皮を矧いだ玄関なんかに置く敷物のように、あつくんの皮が張り付いている。ドライバーも「まいつたよ。」と言わんばかりの苦々しげな表情で煙を吐き出しながら私に会釈し、片手をあげて挨拶をした。これがスジである。言葉はなくとも人間はこういつたスジで会話をするのである。

「ふう。」だから中身がすつ飛んで皮だけになってしまったのだが、あつくん。数百メートル先すつ飛んで雑草生い茂る草むらに落ちたキミの中身はきっと獸や昆虫の餌だね。土に帰つて悔い改めよ。

煌めきは長く続かない。

私は知らず知らずあつくんの寝癖を撫でていて、もしかしたらその手が涎臭くなつてしまつたのではないか?と心配になり、臭つてみたりして。涎は干からびてしまつたのか、直接鼻を近づけない限りは他にニオイを転移させる程の力はもはやないようであつて、私の手も臭くない。

歩行者用信号は青色に変わり、自動車たちはしっかりと常識的に停止線で止まつた。

あつくんはそれを黙視で確認してからすたすたと横断歩道を歩いていった。

信号無視はしないんだね、あっくん。そう言つことだけはしつかりしているんだね、あっくん。規則を守る堅苦しいガキなんだね、あっくん。

敷物になつて玄関を暖め、くたくたになつて帰宅する父の疲れた足を癒してはくれないと言つことか。言語道断だな。親不孝者めが。

畜生畜生と舌を打ち、指を鳴らして地団駄を踏みながら私はあつくんの後から横断歩道上を歩行して国道を渡った。

それから海岸に続急坂を気持ちを落ち着けつつ歩くのだ。それが散歩コースなのだから。畜生。

それにしてもさわやかな夕暮れは血なまぐさい空想を霧散させんばかりの風たちを纏つて美しくある。

夕焼けの朱。

ゴルゴタの丘は後ろにあつて私を狂気に追い込もうとしているが、この夕暮れさえあればその甘い誘惑から逃れることはたやすい。愛らしい我が子が小走りに坂を下り、待ち遠しい海岸を田指している。

あ、こけやがつた。

かわいそうに抱き起こしてやらなくてはと、私はあつく人に駆け寄りつつだが心の中に声が響いて。

「毎日ゲームばつかやつてつから足腰が弱くなるんだよ、あつくん。年寄りのようだ。」

このひ弱な息子の将来を想うとストレスがたまり、潮風は塩辛のよつなニオイに変化する。

おお、スンゲエスンゲエ、これは大迫力だと感心した。

こけたあつくんは足腰が弱くて踏ん張りが効かないためか、最初はゆっくりとしたスピードだったのだが転がり落ちる勢いにノッて加速していく。

ライク・ア・ローリング・ストーン。

そんなフォークロックなDJもじきの思考は徐々に自らの愉快な笑い声と共に霧散して、車輪のよつて、妖怪「鬼車」のよつになん

だか炎の如く血飛沫をまき散らしながら坂を転がり落ちて行く我が息子の後を私も全力疾走で追いかけて行く。私はゲームなどしない、今は。そりや確かに数年前まではFFなんかを必死でやつていて、あまりにも感動的なエンディングに涙を流したりもしていたが、次第に睡眠不足が蓄積し作業効率が低下、社内での私に向けた評価がガタ落ちになり、危うく人生の破滅を見る寸前で我に返つてROMを叩き割つたからこそ今の私の地位がある。ここまで人生を回復するのに要した長い苦難の年月が思い出されて私は疾駆しながら男泣きに泣いた。

あつくんの血飛沫、回転につれて脳天からコンクリの路上に激突し削がれて行く肉片骨片、そして私の涙。それらは渾然一体となつて夕焼けの朱と混じり合い、空気一面がピンクがかつて美しい。削れて痛いか？ゲームにばかりうつつを抜かしていやがるからそんな老人のような肉体になつてしまふのだ、悔い改めよ。

私は幼児のようにキャッキャと声を上げて笑い、血塗られた大車輪を追つて坂を下りそして・・・・・。

海。

空氣一面は相変わらず朱に染まつていたし、塩辛的な生臭みを残してはいたがあつくんの頭は削れてなくて、さつきこけた拍子に膝小僧をすりむいてはいたものの概ね元氣で海岸に向かつて、そしてまるで沈み行く大きな太陽に向かつているようだ、それがなんだか嬉しくてわたしはジンとする胸に手を当てて立ちつくしていた。

坂道。

海。

大きな紅い太陽。

息子。

塩つ辛い味は風であり、また私自身の涙でもあった。

そして海は生き物のように蠢く。

そしてさらに夕暮れの紅い日差しを反射して眩しく輝く波が飛沫をあげながら砕け散る、その海は美しい。

残念なことはこの海は砂浜ではないと言つことである。

とはいながらも波打ち際には多少の砂があり、それは波打ち際なのだから当たり前だが波が打つその海水に浸つて泥になつてゐる。まあ、どうどうでんまり綺麗じやない。

それよりももつとずっと陸よりの場所が俗に浜と呼ばれている場所に当たるのだがこの海は、浜が一面砂利になつていて歩くとじつごつして、真夏などは石が灼けてみんな「あちちあちち」と、インディアンがウォーダンスを踊るように跳ね回る。

もつともこの海岸は急深なうえに鮫が回遊していて遊泳禁止区域になつてゐるのでここで遊んでいるのは釣り人かあるいは、金をかけずには子供を喜ばせる事に心を碎く貧しい市民くらいのものなのであり、最近では海岸線の浸食も激しくなつて砂利の浜もまた狭苦しい浜になり果ててしまつてゐるのでそう言つた貧しい者共さえあまり訪れることはない。

そんな寂れた砂利浜にやつてきた私とあつくん。あ、私たちは貧民ではないから。どちらかといふと・・・ま、中流でしじうね。
ゞく一般的な家庭ですよ。年収は非公開。

ところが、あつくんはと言えば海に向けて、そこら中無数に在る小石の数々から適宜適当なものをチョイスしては海に向かつて放つてゐる。

先程来いつているようこの子はひ弱で腕力がないから小石は波打ち際まで届かない。従つてずいぶん手前で小石は堆積して行くばかりである。それならもつと海に近づいて小石を投げれば海に小石

が届いてちゃぽちやぽして楽しかねりつへどだれでも思つのだろうが、そこはあっくん度胸もないのである。ガキのくせにどこか海に対する恐怖心が強く、溺れたくないからなるべく近づかない方が正解であると思つてゐるのである。

情けないことには小石が海に届かないからといつて悔しがることもないのである。競争心皆無。がんばり皆無。「別にいいじゃん、ボクは小石を投げることそのもの、その行為が楽しいのであって、海に届くかどうかなんて言うのは大した問題じゃない」といいたげにひたすら小石を堆積させているのだが、その堆積を見てはちょっと悲しそうな顔をするところがいじましい。

たしかにこの海岸線も汚い。たばこの吸い殻とか、花火の燃え力スとか、使用済みのコンドームとか空き缶空き瓶紙パックペットボトルなんかも飛散している。

だがね、あっくん。人間はそういうモノを拾つて持ち帰つて自宅で処分したり、そもそもいかない場合は浜で火を焚いてもやすとか、そういう環境への配慮というか、エコ感覚というかそういうのを持つていなければならぬのであって、ほら今のキミのようにキャラメルなんかを包装してあつたとおぼしきビニール類や空き缶などがあろう事か海に放り投げるという行為は言語道断、許されざる行為なのだよね。またこういう人間としての違反行為をするときに限つてどういうわけだかパワーをみなぎらせて投げるものだからゴミ類はマジで海に投棄されて、白く美しい波はゴクゴクとそれを飲み込んで行くのだ、毒とも知らずに。キミの投げたキャラメルの包装紙を喉に詰まらせて息絶える魚や鳥の気持ちを考え、おまえが身代わりになつて悔い改めるが良い。

それを見ていた父は一気にストレスが過剰になる。

「んが?」

と言つ間であつた。

砂利に体育座りしてガキの暴挙を眺めていた私がついに我慢しきれず、「あっくん、おやめなさい」と忠言するために立ち上がったその時、海面が真っ黒く盛り上がりそこから巨大な熊手のよつに波が現出してきて私たち親子を飲み込んだ。

私は幸いにもそれなりに体力も根性もあるので全身ずぶぬれになりましたが、ながらも足を踏ん張り、耐えることができた。

あっくんは不幸というか自業自得といつかあっさりと流れさせてしまった。

一瞬、磐梯黒くらげのような物体を波間に見たような気がしたのだが、それがあっくんだったのだろうか？

すぐに消えた。

「…」
「…」

と、私は絶叫し、先ほどまであつくんが投げていたゴミ共ですっかり汚らしくなった波打ち際に膝をつき、ぞふんぞふんとうち寄せる鬱陶しい波の文字通り波状攻撃に身を震わせ頭を抱えて泣いた。なんということだ、愛するわが子は父の見守る目の前で残酷な自然の暴挙により巨大な自然の体内に引き込まれてしまったのである。哀れなあつくん、可哀想なあつくん、この父はキミを失うその瞬間に手を差し伸べることすらできなかつたのだ。だつて急だつたのなもの。

あつくん、キミは今頃きっと、鮫の餌食。
あつくん、食いちぎられたキミの半身はきっと海底に沈んで釣り糸やらビニールロープやらコンドームやらとこづ絡まりやすいゴミたちを引き寄せて、その重量が大幅に増大してしまってほびに絡まってしまって暗い海底から動けなくなるのだうね。

そして先ほどキミが波間に投げたあのキャラメルの包装紙、今はまだその軽さ故に海面近くを漂っているのだろうけれども直に、それもヒラヒラと沈んでゆくだろう。そしてそのビニールのたどり着く先。

それが上半身は鮫に食われてなんだか得体の知れないぐるぐる巻きの肉塊になり果てたキミの屍の上。

そう、それはヒラヒラと舞い降りる。美しく、プランクトンの死体のように雪のようだ。

もう一度私は絶叫して泣いた。

!

そして顔面に激烈な衝撃を感じて「いてえな、おい」と咳きながら顔を上げるとそこにはなぜかあっくんがいて、怖い顔をして私を見ていた。

口をあんぐり開けて惚けている私の顔面を更に、小さくて可愛いといえばいえなくもないのだけれども実際には薄べつたいで結構鋭く痛いナイフのようなその手であっくんは張り飛ばしたのである。けしからん。

父を殴るとは何事だこいつ。

怒りがこみ上げ、このガキにはしっかりと悔い改めさせなきゃならんなど、指の関節をぼきぼき鳴らして実力行使の準備を進めていたのだけど、

「あそぼ、パパ、あそぼ」

と、とつてつけたような笑顔で無邪氣にいわれたらもうダメ。

私の顔面は蒟蒻になる。そして息子を抱き上げ

「あっくう～～ん」

と思わず甘つちよひい声を上げてしまつのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4185b/>

死は芸術

2010年10月9日03時14分発行